町長ひとりごと ⑭

斉藤 譲

男の涙

頑健な人のことを、俗なことばで「叩いても転ばしても死なない」とよく形容する。

木戸の椎名 博さんは、失礼ながらまさにこう言いたくなるほど逞しい体の持主で、他人の面倒見のよい人情派行動人間であった。

この椎名さんが、昨年の晩秋に突然病に罹り、年明け一月の末に他界してしまった。あまりにも呆気ないその死に、周囲は唖然とするばかりで、私もいまだそれが信じられない気持ちである。享年七十歳、惜しみても余りある死であった。

椎名さんは、警察官を定年で退職された後、町のいろいろな役職に就かれて、八面六臂の活躍をされていた。酒も豪快で、飲めば談論風発して周囲を圧倒し、歌えば免許皆伝で聞く者を唸らせた。しかし、一度怒れば仁王の形となり、喜ぶ様は天真爛漫まさに子供の如くであった。

▼実は、私はこの椎名さんに、一度お叱りをうけたことがある。

「町長、この頃ひとりごとを、手抜きして書いているな。中味が薄くなったぞ。期待して読んでいる者もいるんだからな。」

たしかにその頃、一時忙しさに追われて、何とか原稿用紙のマス目を埋めようと、四苦八苦をしていたときがあった。所詮そんな時の文章は、とうてい読むに耐えられるものではなく、自分自身でも後ろめたさを感じていたのである。椎名さんの鋭いその指摘は、私の胸にグサリと突き刺さった。まさに「忠告」である。以来、私は原稿用紙に向かう度に、あの一言を思い出し、刷りあがった広報が配られる度に、椎名さんの反応が気になった。

▼人は誰でも、他人との関係を損うことを恐れる。だから、「口は禍いのもと」とばかりに、真に言うべきことまで腹の中に飲みこんで沈黙してしまう。

これが日本人大半の生き様であり、慎しさだとしてきた。しかし、それ故に人間関係を複雑にし、空洞化してきたことも見逃してはならない。特に、それが家族にまで及んでいることは、社会の危険信号である。いま個人の自由、人権の尊重の美名の下で、反社会行動やモラルを欠いた行動が、沈黙の世界を大手を振って闊歩している。

現代は、忠告という言葉が死語になりつつある。常に相手の顔色を伺いながら、対人関係を保とうとする社会は、この忠告を遠ざける。

真心をもって、いさめ諭すことこそが忠告であり、それ無くして真の友情も、正義も、信頼も成り立つものではない。これを実行するには、自らも傷を負う覚悟と勇気が必要であり、これが出来る人こそ誠の人物だと私は思っている。私は椎名さんの忠告に、失いかけていたものを、とり戻したような気がした。このことがあってから、いっそう椎名さんに親しみを持つようになった。

▼椎名さんが入院中に、何度かお見舞いに伺った。集中治療室に入っておられたので、わずか数分の対面ではあったが、その度に私の手を握り、

「例のことはどうなりましたか。」と苦しい息の下から、必死にたずねるのである。例のこととは、椎名さんに中に立っていただいたある仕事に関することであるが、当初ちょっとした躓きがあって、その行方を死の床で心配していてくれていたのである。私は今更に椎名さんの責任感の強さに感動し、例えどんな約束事でも、最後までこれにこだわり続ける男の生き様に心打たれた。

「椎名さん、安心してください。お蔭ですっかり解決しましたよ。」と言えば、

「本当にだいじょうぶですか。本当に。」とすがりつくように聞き返してきた。

やがて、それが確かだとわかると、いかにも安心したように顔を深く枕に埋めた。その両眼からは二筋の涙が静かに頬を伝わっていた。あまりにも美しく切ない涙である。これを本当の「男の涙」というのではないかと、私はその時思った。

▼私が椎名さんを最後に見舞ったのは、亡くなられる数日前であった。いつものように、うれしそうな顔をして手を差し出してきた。しかし、その動作は鈍く、その腕はこれがあの逞しかった椎名さんの腕かと思うほどにやせ細り、目の遣り場を失った。それにしても、人間の体はこんなにもたやすく萎えてしまうものなのだろうか。

椎名さんの口から、

「町長、もっと生きたいよ。」と、腹の底から絞り出すような一言がこぼれた。一瞬、私の胸の中を凍りつくような木枯しが、悲しい地響きをたてて吹きぬけていった。

合掌